

臨床検査で遭遇する異常蛋白質

基礎から発見・解析法まで

藤田清貴 著



ついに藤田清貴氏の本が出た。藤田清貴氏（千葉科学大学教授）は30年以上にわたり、臨床検査の第一線の現場で働いてきた臨床検査技師であるが、彼の洞察力は素晴らしく、臨床検体から出てくる異常値に対して、なぜそのような異常が起こるのかを常に考えている臨床検査技師である。30年前は秋田の小さな病院の若い技師長であったが、早くから臨床検査データの異常に興味をもち、その解析を行うため同好の士を集めてセミナーを開くことを考え、それを実現して現在に至っている。その後、彼は現信州大学医学部保健学科の准教授（当時助教授）となり、教育、研究に従事した。その間にアメリカに留学したが、2009年請われて現職の大学の教授となった。しかし、秋田でのセミナーはそのまま継続されている。

本書は大きく、基礎編と実例編に分かれている。図表がたくさん採用されていて、実に見やすい構成になっている。基礎編は「発見のための基礎知識」の副題がついているように、血清蛋白質の基礎知識、血清蛋白質異常症の解析方法がわかりやすく解説されている。初心者でも簡単な道具があればすぐにでも実験ができるようになっていて、しかも長年著者が行ってきた電気泳動法やプロテイング法のコツもていねいに説明されている。

実例編「異常データの謎解き」は実は本書の神髄であり、著者ととも30年の長きにわたり続けてきた「田沢湖セミナー」の運営に携わってきた同好の士である臨床検査技師や医師が疑問に感じた症例を持ち寄り、夜遅くまで議論を戦わせて、後日さらなる実験を重ねて得た成果の集大成が掲載されているのである。実例編は5章に分かれ、そのなかに多くの症例の解析結果が織り込まれている。

たとえば、血清酵素であるLD、CKなどがときに免疫グロブリンと結合する現象がみられ、高LD、高CK症例が実地医家を惑わせてきた。とくに高LD例は肝障害、心筋障害、癌などの病態を疑われるこ

とがあるが、年余にわたる試行錯誤の結果、この異常を逆転の発想で、免疫グロブリンが自己抗体として働いて結合するのではなく、酵素自体が免疫グロブリンの立体的なある部分を補酵素と誤認して結合することを突き止めた。当時この発表は、関係学会に衝撃をもたらしたものである。その後低LD血症で、活性中心に結合する免疫グロブリンのために起こる症例も発見している。

また、フルクトサミンが高値を示すにもかかわらず糖尿病でない患者が発見されたが、その意味はわからなかった。青森で最初にその現象を発見した臨床検査技師がセミナーで発表し、その解析が藤田氏に委ねられた。その現象はとくにIgA型M蛋白例にみられたが、解析の結果、グルコースが結合したアルブミンがIgAと結合した結果であることが判明し、また、グリコアルブミンや血清蛋白分画にも影響を与えることがわかった。その他、見過ごされやすいM蛋白症例が数多く解析されている。

現場でデータに疑問を感じた医師や臨床検査技師をはじめとする医療従事者は、まずこの本に掲載されている症例かどうかをチェックして、記載症例に合致しない例では新しい発見も起こりえることを考え慎重に解析する必要がある。また、看護師や薬剤師、学生などの諸氏は、臨床の現場に潜むさまざまな臨床検査の異常な現象の一端を知る意味でも本書が役立つであろう。近年関心の度合いが減ったが、臨床的には重要で、決して疎かにできない蛋白異常についての重要な書物であり、ぜひ精読いただきたい。

（自治医科大学名誉教授 櫻林郁之介）

<B5判/168頁/定価4,620円（本体4,400円＋税5%）/医歯薬出版/2010>